

キングコング・ガールとしてのヴィルジニー・デパント

中村 彩

フランスでは売れっ子作家だが日本ではあまり紹介されていない作家のひとりに、ヴィルジニー・デパントがいる。1969年生まれ、ナンシー出身のこの作家が24歳で発表したデビュー作『バカナヤツらは皆殺し』(*Baise-moi*, 1993年)はセックス、ドラッグ、強姦、殺人を繰り返すふたりの過激なパンク少女のロードムービーのような小説だ²。このような暴力的ともいえる少女たちのパワーを、下品ともいえる若者言葉を用いた文体でその後も何度か描いているデパントだが、4作目の『ティーン・スピリット』(*Teen Spirit*, 2002年)——30歳無職のどうしようもない男が突然自分に13歳の娘がいることを知らされ父親になっていくという成長物語——などを経て、単にスキャンダラスで挑発的な女性作家というイメージから脱皮したようにも思われる。これまでに12作が発表されているが、2010年には『アポカリプス・ベベ』(*Apocalypse Bébé*)でルノー賞を受賞し、今となってはゴンクール賞やフェミナ賞の審査員も務めるベストセラー作家である。

そのデパントの最新作が『ヴェルノン・シュビュテックス』(*Vernon Subutex*)三部作だ。レコード屋だったが50代にしてホームレスになった男ヴェルノンのパリでの生活——それは社会から排除されがちな者同士の新たな共同体の模索である——を描いたこの作品はさながら21世紀のロマン・フィユトン(連載小説)と評され、話題を呼んでいる。その1巻が2015年1月7日、つまりシャルリ・エブド事件の当日に、ミシェル・ウエルベックの『服従』とほぼ同時に発売され、半年後に2巻が、そして最終巻は予告されていたのよりも1年ほど遅れて2017年5月、ようやく刊行されたところであり、この間に刻々と変化していった社会情勢や事件——2015年11月13日のパリ同時多発テロ事件、2016年春に労働法改正反対を唱えるために生まれたヌイ・ドゥブー(*Nuit debout*)運動など——が反映されているという点においても興味深い。本稿で

も「クロニク」としては話題のこの三部作を取り上げるべきかもしれないが、刊行のタイミングと紙幅の都合上、ここではデパントの作品世界の一端を明らかにしてくれる別の作品、『キングコング・セオリー』(2006年)³を取り上げることでこの作家の紹介を試みたい。

『キングコング・セオリー』はデパントが自伝的なエピソードを語りつつ独自のフェミニズム理論を展開している自伝的—理論的テキストである。ここではフェミニストとしてのデパントの立場とは何なのか、暴力・売春・ポルノという3つの問題に対する彼女の応答、そして作品のタイトルにもなっている「キングコング」とは何なのかという点について明らかにしていきたい。

「新たなフェミニズムのためのマニフェスト」⁴。これが『キングコング・セオリー』刊行時に出版社グラッセがつけた宣伝文句であった。これは一体どういうフェミニズムなのだろうか。

この著作は次の一文で始まる。「私はブスの立場から、ブスたちのために、ばあさんたちやトラック運転手の女たち、濡れない女たち、欲求不満の女たち、欲望をそそらない女たち、ヒステリーの女たち、バカナ女たち、いい女が売られる市場からはじき出されたすべての女たちのために、書いている」⁵。「いい女」の規範からは外れた者として、そういう自分のような人のために書く、という明確な立場の表明である。

女性性の規範から外れた者として／のために書くというこのスタンスはフェミニスト的なものと言えようが、デパント自身は特定の女性の運動や団体にかかわっているというわけではなく、自らをどこにも属さない「自由分子」、[アナールコーフェミニスト]とみなしている⁶。実際に彼女が引用するのはメアリ・ウルストンクラフト、ヴァージニア・ウルフ、シモーヌ・ド・ボーヴォワールといった時代も背景も異なる多様なフェミニストたちの言葉である。とはいえデパントはアメリカの理論、特に1980年代にポルノをめぐる展開されたいわゆる「セックス・ウォーズ」

の中で「プロセックス派」と呼ばれたフェミニストたちに影響を受けていることを認めていて、『キングコング・セオリー』ではフランス語にはあまり訳されていなかったその系譜のフェミニズムを紹介しなかったと述べている⁷。その言葉通り、巻末の文献表にはゲイル・ルービンやパット・カリフィアといった論者が名を連ねている。またジュディス・バトラ、ダナ・ハラウェイ、テレサ・ラウレティスといったクィア理論ではよく知られた理論家の著作も並んでいる⁸。

世代という観点から言えば1969年生まれのデパントはまさしくポスト68年世代、すなわち1970年代のフランスのフェミニズムが勝ち取ったリプロダクティブ・ライツなどの諸権利をはじめから享受してきた世代である。彼女の世代は当然のこととして男女共学の学校に通い、ミニスカートをはき、ピルを服用することができたし、男性の経済的な支えがなくても自立して働いて生きていけることを知っていた、とデパント自身は述べており、70年代の運動の成果に自分が多くを負っていることに自覚的である。とはいえこれだけですべてが解決したわけではないという意識がデパントにはある。そこで本書で順に取り上げられるのが、レイプと暴力、売春、ポルノというフェミニズムにおける3つの大問題である。

暴力はデパントの作品において様々な形で現れる。彼女の女性登場人物たちはしばしば暴力の加害者である——拷問者や殺人者やテロリストである——と同時に、被害者でもある——強姦された経験があったり、男性や家族や社会からの精神的・心理的暴力の被害者だったりする。『キングコング・セオリー』ではこの暴力の問題が、デパント自身が17歳のときに受けたレイプ被害の体験を通して論じられている。

デパントはこの体験をもとに、レイプ被害の一番の問題はそれが語られないことだと述べる。すなわち被害者は簡単に立ち直ってはならない——そうすると被害者も性行為を楽しんでいたことになりレイプとみなされなくなってしまうから——が、同時に暴力をもって加害者に復讐することもできないというダブルバインドに陥ってしまう、そのことが問題だというのである。とここまでは一般的な議論だが、ここからデパントは女性による暴力に関する独自の考察に入っていく。デパントは自分がレイプされてい

る最中、ポケットにナイフを持っていたにもかかわらずなぜかそれを使おうとは思いませんでした。ことに言及し、自分が女性であるという感情によってそのときは自ら暴力をふるうという可能性を想像することさえできなくなっていた、と振り返る。このときの体験から彼女は、現代社会は「女の子を無力化する装置」⁹であって、だからこそ女性はたとえ正当防衛でも暴力をふるうことができなくなってしまっている、と述べる。とはいえデパントは暴力には暴力で応えるべきだと主張しているわけではない。彼女が求めるのは女性が暴力を行使する可能性を想像する力である。そのことにより男性の欲望はコントロールできないものであるとする「レイプ幻想」を変えていこうとするのである。

売春とポルノに関してはデパントは、全面的な禁止に反対する立場をとるが、ここでも彼女はあくまでも自分の体験をもとに理論を展開する。売春に関しては、20代の頃の自分の売春の体験を紹介しつつ、自分のセクシュアリティを自己管理し探究しそれによって金銭を得るという経験は、働く条件によっては女性のエンパワメントにつながると主張し、それは自分がレイプの後に立ち直るのに不可欠な段階であったとも述べたうえで、売春婦を自立した人間としてはではなく搾取される悲惨な存在としてしか描かないメディアを批判している。デパントによれば売春はそれ自体として女性に対する犯罪であるわけではなく、必要なのは売春婦のさら

なるスティグマ化ではなくその労働条件を検討することなのである。

ポルノに関してもデパントは、『バカなヤツらは皆殺し』を映画化した際の個人的な体験に触れ、検閲を受けることとなった背景にあるのはポルノ映画やポルノ女優に対する偏見であると述べポルノを擁護する立場をとる。デパント曰く、ポルノには多くの人々にとって様々な心理的な負担を和らげるという重要な効用があり、全面的に禁止する必要はない。必要なのは男性に占有されているポルノを女性が取り戻すことである。そのためには出演する女優の労働条件の改善を求め彼女たちの将来を長いスパンで考える必要があるし、また女性によるポルノの消費を擁護しなければならない。このようにデパントは制作・消費の両面において女性がポルノを取り戻す必要性を訴えている。

以上のようにデパントは暴力に関する想像力、売春、ポルノのいずれに関しても、全面的に廃すのではなく、これらを女性たちが再領有化することによる問題の解決を求めているといえよう。

最後にデパントは自分自身であることと女であることとの難しい関係について、映画『キングコング』を引き合いに出しながら論じている。『キングコング』と言えどももちろん1933年のメリアン・C・クーパーとアーネスト・シェードザックの映画史に残る名作だが、デパントが取り上げるのはピーター・ジャクソンによる2005年のリメ

イク版である。コングは1933年版では人をも食べる恐るべき暴力的な怪物として現れるが、2005年版ではデパントが述べるように雌と雄、人間と動物、子どもと大人、善と悪、原始と文明の間にあり、「多形で超強力なセクシュアリティの形態の可能性」を示している不思議な生き物である¹⁰。しかし男たちや国家は、コングを捕獲して見世物にしようとし、最終的には殺してしまう。そしてコングを救いたいと思うヒロインのアンは結局何もできず、完全に無力化されている。このように分析した上でデパントは、これは現代社会の縮図だと述べる。本書冒頭で筆者は「私は女としてはケイト・モスではなくキングコングだ」¹¹と書いているが、その意味がここで明らかにされている。デパント自身が規範的な女性性から逸脱して、キングコングのような理解不能な生き物と思われているということである。15歳で精神病院に収容されたときも、作家としてデビューしてからも、自分はそうは思っていないのに女として何か足りないかのように周囲から扱われてきた。なぜなのか。様々な自分の体験を語りつつ思考をめぐらせた結果デパントがたどり着く結論は、「女らしさ、それは媚びを売ることであり、卑屈になる技術である」¹²ということである。大人になり、模範的な女になることを求めてくる規範に対して屈してしまった部分もないではないことを認めつつも、デパントはこう言う。「私の中にいる怪物は騒がなくなったわけじゃない」¹³、と。

¹ Virginie Despentes, *Baise-moi*, Paris, Éditions Grasset & Fasquelle, 1999 [Paris, Florent Massot, 1993] (『バカなヤツらは皆殺し』稲松三千野訳、原書房、2000年)。このデビュー作のみ邦訳がある。また2000年にはデパント自身が元ポルノ女優の友人コラリー・トラン＝ティと共同でこの小説を映画化しているが、フランスでは過激なポルノ映画とみなされ上映禁止処分となり、映画史に残るセンセーショナルな検閲スキヤンダルとなった。日本では『ペーゼ・モア』というタイトルで2001年に公開されている。

² その意味でこのデパントのデビュー作はリドリー・スコットの映画『テルマ&ルイズ(Thelma and Louise)』(1991年)を彷彿とさせるが、デパントの作品は最後の抵抗の手段としてのふたりのヒロインの死までもが奪われてしまっているという点でより絶望的と言えるかもしれない。

³ Virginie Despentes, *King Kong théorie*, Paris, Éditions Grasset & Fasquelle, 2006. (以下KKTと略す。)

⁴ グラッセのLivres de pocheホームページ、2016年11月30日参照。http://www.livredepoeche.com/king-kong-theorie-virginie-despentes-9782253122111

⁵ KKT, p. 9.

⁶ « Despentes : anarcho-féministe », *Le Magazine.info*, juin 2007, propos recueillis par Marianne Costa. 2016年11月20日閲覧。http://www.lemagazine.info/?Despentes-anarcho-feministe

⁷ « King Kong théorie : Entretien avec Virginie Despentes », *Mauvaiseherbe's Weblog*, 11 septembre 2008, propos recueillis par Susana Arbizu et Henri Belin. 2016年11月20日閲覧。https://mauvaiseherbe.wordpress.com/2008/09/11/

king-kong-theorie-entretien-avec-virginie-despentes/

⁸ またデパントは『キングコング・セオリー』の延長として2005年から2009年にかけてドキュメンタリー *Mutantes. Féminisme porno punk* を制作している(Blaq Out、2010年DVD化)。これはフランスやアメリカやスペインのフェミニズム・クィア系の活動家、アーティスト、理論家やセックスワーカーにデパント自身がインタビューしているものである。

⁹ KKT, p. 48.

¹⁰ KKT, p. 112.

¹¹ KKT, p. 11.

¹² KKT, p. 126.

¹³ KKT, p. 131.